四谷の
千枚田だより
第137号

今年もサンタのおじさんがやってきた

クリスマスイブの二十四日、六人のサンタクロースは二頭のトナカイが運転する軽トラの荷台にクリスマスツリーを派手に飾り、十六人の良い子が待つ家庭を訪れた。サンタやトナカイはなけなしの小遣を出し合い買い揃えた品物をプレゼント。この行事は旧鳳来町連谷分団の時代から毎年行っているもので連谷魂の顕れである。内緒だが、子供たちはサンタさんがどこの家に何時頃来るのか、ちゃんと知っている。

傘杉のしめ縄

樹高日本一を誇る鳳来寺山参道の傘杉(六十㍍)に地元傘杉保存会の皆さんで年の瀬に大しめ縄張替作業が行われた。一時期は保存会の高齢化により休止されたが、推定樹齢八百年、日本一の高さを誇る傘杉を粗末にできないと再開した。

その、傘杉のしめ縄は環境に優しく育てられた「四谷の千枚田」の糯藁が選ばれ、毎年、提供している。

新しいスタート

あけましておめでとうございます。

連谷地区も雪が降り、積もりそうな気配がしています。

十二月に地区の方々に作っていただいた門松が校門を飾り、新しい年を祝っています。

閉校まで一年三ヶ月となった本校にとって、一つ一つの取り組みに重みを感じる年となりました。

子どもたちの成長を願い、学校・家庭・地域が一体となって歩んでいきたいと思います。

本年も、どうぞよろしくお願いします。

学校行事より

野良仕事

千枚田も、うっすら雪化粧した新年を迎えた。

昨年、十二月中旬から急激な寒波が押し寄せ、寒い日が続いた。その、寒さの合い間に冬には珍しく雨まで降った。例年ならどこの田んぼも冬耕が終わり、気の早い百姓は二回目の田起こしをしている時分であるが、天候には逆らえない。

成人式の三連休にやっと天気も定まり正月、新年祝賀会、大般若と酒漬になった身体のアルコール抜きを兼ねてアッチこっちで田起こしが始まった。

合言葉は「また、忙しくなるのん」

中日新聞掲載記事から

一月四日付けの「ジュニア中日」に連谷小の「田んぼが大好き」というタイトルで掲載された。「ジュニア中日」は中日新聞エリア九県に毎週日曜日のど真ん中に挟まってくる小中学生向け紙面です。

ただ、紙面文中で「四谷千枚田」について教育報道部の阿部さんと議論した結果、今回は「新城市の四谷の千枚田」では「の」のダブり感がありしっくりしないので「新城市の四谷千枚田」でご理解をということで妥協したが、本来は「四谷の千枚田」であること、また、地元、中日新聞は「四谷の千枚田」の応援団長であることもお願いした。

（寄稿　棚田学会通信四十五号）

生きものと共生した体に優しい米づくりを目指して

鞍掛山麓千枚田保存会
会長　小山舜二

四谷の千枚田は鞍掛山（883m）に降った雨が地中深く浸透し、湧水となり棚田全部を潤している。かっては、千二百九十六枚が耕されていた田んぼも減反政策（生産調整）が起因、休耕、転作が余儀なくされた。それに、追い打ちを掛けるように経済成長期に突入、棚田の百姓は効率の悪い段々田んぼに見切りを付け、労働力の供給者として現金収入を求め、都市近郊へと流出、平成元年には373枚にまで減少した。これに危惧した筆者は平成三年から「地域の宝」として棚田の保全、継承活動を開始、平成八年には四百二十枚まで復田した。

総面積三百六十㌃、1戸当たりの耕作面積十二㌃（平均十五枚）と規模も小さく生産性は極端に低くい。

四谷の千枚田は「湧き水、天日干し、これ以上贅沢な米はない」、また、「真正面から見る姿は他に比類なし」と定評があり自然観察の場として人気を博している。平成十三年から親子観察会を積極的に実施し、その結果、以前、棚田に普通に見られた生きものの生息数がかなり減少していることに気づき、農薬や化学肥料に依存してきたことが大きな要因であることを実感した。そこで翌年（平成十四年）生きものの自然再生を視野にビオトープを設置した。中でも希少種であるモリアオガエルやヤマアカガエルなど、今まで見られなかった種の繁殖場とするための保全・再生活動に取り組んだ。モリアオガエルは三百㍍範囲内（遺伝子レベル）の自然分布域でカラスにいたずらされ、壊れた卵塊を家に持ち帰り、水槽飼育、カエルに変態まじかのオタマジャクシを親子観察会においてビオトープ内に放すと同時に田んぼの一角にナンテンを植えたところ、棚田の百姓から「なぜ、田んぼにナンテンを」と奇異の目でみられた。その後、毎年、壊れた卵塊やオタマジャクシを移殖した結果、四年後の平成十八年六月にはビオトープ内で二個体の産卵を確認。（この年、三個体の産卵確認）　その後は毎年、産卵数も増え、分布も順調な拡大がみられた。なお、平成二十一年六月三十日には念願のナンテンにも産卵。苦節七年、「手心を加えれば、結果は生まれる」の瞬間を味い、小躍りした。モリアオガエルがナンテンに産卵したことは、棚田の百姓や都市近郊から訪れる人々に大きな理解を得ることができた。

ヤマアカガエルも春（二月）の最初の雨の朝には必ず産卵。その後、雨の朝には必ず産卵するが、概ね四回目の産卵個体は最初に生まれたオタマジャクシの餌となり、ほぼ、一日で食べられてしまう、また、あまり密度が高いとカエルに変態しないことも判り、自然の摂理が如実に表れることも判明した。その後、両者の自然繁殖、個体数の拡大も順調にみられ、四百二十枚の棚田全部をビオトープと位置づけた。

モリアオガエル、ヤマアカガエルの自然再生から大きな波及効果が生じ、現在ではタニシ、ドジョウ、ワシ・タカ類なども拡大の傾向にある。平成二十五年には二つがいのクマタカが飛来、子育てのため、ヤマカガシ、シマヘビなどを餌として持ち去り、極端に減少したことが残念であったが、なぜかマムシは残った。

こうした地道な活動を「四谷の千枚田だより」で発信。大きくは生物多様性国際会議（COP10）招致貢献、エクスカーション会場として取り上げられた。

地元企業「横浜ゴム新城工場」は生物多様性調査をテーマに過去三年間、千枚田周辺のモニタリング調査を実施、昨年から千枚田二ヶ所にビオトープを設置、多様性に富んだ自然再生に貢献して頂いている。

英国放送協会BBCは多様性に富んだ四谷の千枚田を日本の里地・里山と位置付け、モリアオガエルの生態を主に長期撮影（十九日間）を実施した。

地元、鳳来寺山自然科学博物館、市内外の小学生、一般からの「生きもの教室」自然観察会などを依頼されることも多く、単なる観察会ではなく、小さな生きものが稲作を、生態系を支えているといった生物多様性を少しでも理解する場として活用している。

自然再生の取り組みから、その効果を考察すると、カエル類はウンカ等、害虫を喰食することで殺虫剤など減農薬に繋がり、タニシやドジョウは酸素補給やバクテリアの活性を促すなどの効果が生じる。

厳しい作業条件を架せられている棚田の百姓は「いっこくで頑固」だが、一つのビオトープから始まった生きものの賑わいを見て、減農薬や化学肥料から干草などの有機肥料に転換、「生きものと共生した体に優しい米づくり」を目指している。

発　行　平成二十七年一月二十日
鞍掛山麓千枚田保存会
文　責　小山舜二